

自ら問いを立て 学び続ける力の育成（2 年次） — 学校図書館との対話を通して（中学校社会科の授業を例に） — 中町 タ子（京都市総合教育センター研究課 研究員）

現代は先の見えない激しい変化の時代を迎えている。このような社会の変化に対し、学校教育の中では社会に存在する課題を発見し的確に捉える力、一つの結論にたどり着いても、その先にある新たな課題に向かっていく力、自分を取り巻く社会をより良く変化させようとする意欲や態度を、子どもたちに育成する必要がある。1年次の研究結果から、子どもが主体的に学びを深めるためには、自ら疑問や課題を発見し追究する力が不可欠であると考えた。2年次の研究では、子どもが主体的に学び続ける力をつけるため、学校図書館を活用し、子どもの問いを推進力として学びを深める学習について、実践研究を行った。

第1章 1年次の研究より

第1節 自ら問いを立て学ぶ力

平成28年12月に出された中央教育審議会答申には、次期学習指導要領改訂の方向性として「何ができるようになるか」を明確にし、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」について考えていく必要性が書かれている。1年次は、学校図書館の図書分類を活用し、子どもたちに多面的・多角的なものの方・考え方を育成する目的で研究を進めた。その結果、子どもたちは、多面的・多角的な見方・考え方と同時に、知識や学校図書館活用のスキルも、主体的な学びの中で獲得することができた。しかし、子どもの学びの深まりが十分でなかったという課題が残った。そこで、1年次研究での子どもの様子やレポートを見直し、子ども自身の疑問が、学びを広げたり深めたりする推進力になっていると考えた。

第2節 学校図書館を教科授業で活用する意義

学校図書館では、興味関心の対象を様々な分野に広げて学習することができる。また、資料・情報を介して外界との対話から学ぶことも可能であり、そこで得た情報を比較・検討し、課題を見出すこともできる。更に、活用した資料や情報に子どもの考えを紐づけて記録していくことで、思考過程を可視化し、子どもが自らの学習過程をふりかえることも可能である。加えて、学校図書館は、明確な意図がない学習者にも「ヒント」を与えることがある。これらを筆者は「学校図書館との対話」と呼ぶ。情報を得る過程での試行錯誤も含め、「学校図書館との対話」を活かすことで、自ら課題を発見し、学び続ける力を子どもたちに育成できると考えた。そして、子どもの学びの過程を質的に高めることもできると考えた。

第2章 自ら問いを立て学び続ける力の育成

第1節 主体的・対話的で深い学びに向けて

子どもの「なぜ？」に注目し、子どもが自らの問いを連続させ、学びを進めるサイクルを考えた。

図1は本研究で取り組む学習の流れである。

子どもが「自らの疑問→情報収集→気付く・考える→新たな疑問」という学習の流れを繰り返す。子ども自身が、学習のゴールとして解決すべき疑問をもつ。

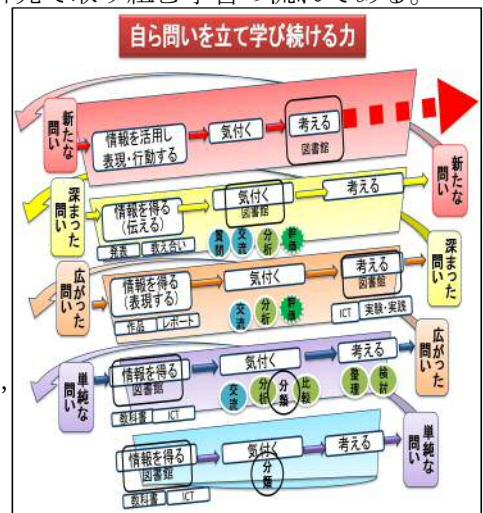


図1 本研究で取り組む学習の流れ

これらを筆者は「自ら問いを立てる」と表現し、問いを連続させることによって学習を広げ、深めていく学び方を、学校図書館を活用して展開した。

第2節 思考を可視化するツールと授業の組立

子どもが主体的に学習を広げ、深めるためには、自らの学習過程を客観視できる仕組みが必要である。また、教師が子どもの学びを支援、評価するためには、子どもの学習状況を見取る必要がある。そこで、子どもの思考過程を可視化するため、「本(情報)との対話」「人との対話」「自分との対話」を目的とした3種類の「対話カード」を考案した。また、これらの「対話カード」を用い、自分および外界との対話を通して、子どもが自ら立てる問いを連続させて学ぶ授業を組み立てた。

第3章 自ら問いを立て学ぶ学習

第1節 授業実践の流れと学習テーマの設定

子どもが自ら問いを立て、学ぶ力をつけるため、昨年度の研究成果物である「分類ワークシート」を使って学習内容を俯瞰した後、3種類の「対話カード」を活用し、学校図書館で授業を行った。このとき、子どもに提示した学習テーマは、既習事項や習得すべき事項を必然的に使い、学習内容の理解につながる、身近で現実的な内容とした。

第2節 子どもの学びの広がりや深まり

個々の子どもが、自由に問いを立て得た情報や、学習した内容を、相互に関連付け、協働して学ぶ中で、学習テーマについての考えを広げ、深める様子が見られた。また、学習テーマを柱とし、協力して情報を集め、考えを出し合って学ぶ様子が見られた。子どもの問いや、協働して追究している課題からは、「問いを立てる→情報を得る→気付く→更に問いを立てる」という過程を繰り返すことで、個々の問いやグループの追究課題の質が高まり、それに伴って、子どもの学びが広がり、深まる様子が見られた。

第3節 子ども自身による学習の振り返りから

多くの子どもの振り返りには、「本との対話」を通して、自らの問いを使い学習を広げたり深めたりすること、疑問を解決し理解すること、一つの課題を深く考え追究することができたと感じている記述が見られた。また、「人との対話」を通して、疑問や意見の交流により、子どもたち自身で学びを深めたり広げたりすること、多角的な観点から考え、課題を深く追究すること、自分の考えを発展させるために他者の意見を取り入れる学び方を習得することができたと感じている記述も見られた。更に、「自分との対話」を通して、自身で学び方や学習方法を様々な点で振り返っていたことがうかがえる記述も見られた。自分の学習が「深まった」「広がった」と考えている子どもの記述も多数見られた。学習が「楽しかった」「充実していた」ことがうかがえる記述も目立った。

第4節 学習が得意でない子どもたちの様子

授業実践の中では、学習の苦手な子どもたちが前向きに取り組む様子が見られた。学習内容を客観的に分析する力等には課題が見られたが、次の学習への問いを立てることや、対話を通して進める学習方法には的確な気付きがもてた。また、定期考査の結果からは、特に思考・判断・表現に関する得点率の上昇が見られた。

第4章 研究の成果と課題

第1節 子どもの意識の変化

生徒対象質問紙調査では、自ら課題を発見し主体的に学習に向かう意識が高まった、筋道を立て多角的な視点から複数の情報を組み合わせて考えるようになった、考えを裏付けるために教科書や参考書以外の本を活用し学習するようになった等の結果が得られた。一方で、疑問をもつことについて「難しい」「めんどろ」と回答した子どもも見られた。

第2節 教師の意識の変化

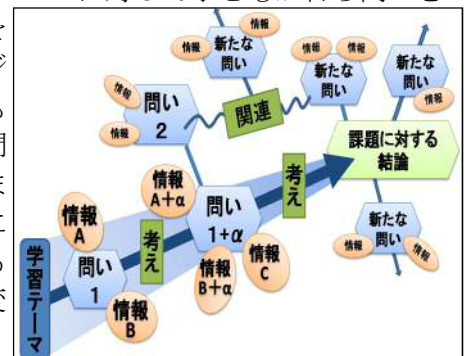
研究協力員への聞き取り調査では、「授業を計画する際、『学習内容に関わること』『学校図書館というツールを活用すること』の二つの要素を意識して、子どもにつけたい力を細分化し、各単元のテーマを段階的に考えるようになった」、「子どもの出す答えに広がりが出るよう、学習テーマを設定するようになった」など、意識の変化がうかがえる回答が得られた。一方で、すべてを子どもに任せるのではなく、子どもたちが広げ、深めた学習内容を教師が総括することの必要性など、課題も見つかった。

第3節 主体的な学びの充実に向けて

本研究実践から、教師が提示する学習テーマの質が、子どもが自ら問いを立て学ぶ上で重要であると考えた。また、教師の提示したテーマが魅力的であるとき、子どもは問いを立て、その問いに集結させるように、情報を取得していった。

図2は学習テーマに対して子どもが自ら問いを立て、情報を

得るイメージを図示したものである。問いの質が高まると、それに合わせて得る情報の質も変化した。また、



人との対話も同様の効果をもたらした。ある一定の結論に達したとしても、その結論に対して複数の問いが生まれ、更に情報を得て考えることで、学びがより一層広がりを持ち、それらを関連付けて考えることで、より良い課題解決につながると考えられた。

本研究では、学校図書館を活用し、自ら問いを立て、様々な対象と対話することで、子どもの主体的で深い学びを引き出すとともに、課題を発見し解決しようとする意欲や態度を育成することができた。